

《報告》

螢狩の唄考

～螢狩の唄が歌われはじめた時期について～

後藤好正

〒223-0057 神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

日本で歌われていたわらべ唄(伝承童謡)について浅野(1988)は、「これらの諸記録類によれば、現行の「わらべうた」の大半は、すでに近世初期頃から歌われた」と述べている。夏の夜、子供達がホタルを追いながら歌ったわらべ唄である螢狩の唄については、江戸時代後期のわらべ唄集や当時の風俗を記録した随筆などに記録が残っていることは知られているが、中期以前については不明である。では、螢狩の唄はいつ頃まで遡れるのだろうか。

わらべ唄の記録はわらべ唄集以外にも、随筆、日記、能狂言伝書、歌謡集、浮世草子、浄瑠璃正本などに散見される(浅野, 1988; 尾原, 1991)。筆者は江戸時代前・中期の俳諧書、狂歌集、浮世草子等から螢狩の唄の記録を見出すことができたので報告し、螢狩の唄が歌われはじめた時期を探る資料の一助とした。

なお、引用作品のホタルの表記は螢で統一し、踊り字はそのまま(くはへと表記)とした。

江戸時代後期・末期の資料

江戸時代のわらべ唄の記録は後期に集中しており、螢狩の唄も5編が知られている(尾原, 1991)。また、幕末期の螢狩の唄を知る資料としては『山の手の童謡』があり、2編が載る(尾原, 1991)。

『^{ろうろうひしよ}弄鳩秘抄』

栗田惟良(葛園)著。常陸国水戸(茨城県水戸市)のわらべ唄を集め、考証を加えたもの。著者の惟良は1824(文政7)年に37歳で没しており、本書の成立は化成期の1804～24年頃と考えられている。

○螢とりの歌

ほふたるこい、山見てこい、あんだのひかりをちよと見てこい。

あんだは阿弥陀にや、山越の阿弥陀なるべし。またお江戸の光ともいふ。行燈のひかりといふは誤りなり。

『熱田手鞠歌 盆歌/童謡/附』

著者は高橋仙果、名を広道、笠亭・古今堂などと号した。尾張国熱田(愛知県名古屋市熱田区)の人で、本書は熱田の童謡を集めたもの。天保初年頃(1830-31)の成立と考えられている。

○熱田童謡

螢こい露のましよ、あつちの水はにがはいよ、こつちの水はあまいよ。 螢とる/時の詞

『尾張童遊集』

著者の小寺玉晁は尾張藩士で、名は広路、連城亭・続学亭などの号を持つ。本書は原題を『児戯』といい、

尾張地方の童戯童謡を集めている。1831年（天保2年）の自序がある。

○ 幼児口遊

螢来い水のましよ、そつちの水はにがいよ、こつちの水はあまいよ。 螢を見る／時いふ詞

『嬉遊笑覧』

喜多村信節（筠庭）著の随筆で、各巻に童戯童謡の考証が多数ある。1830（文政13）年刊

○ 巻十二 禽蟲 石山螢谷

上州にて小児螢を呼に

ほうたるこう、おのがてゝの合子で、かぶら川の水くれう。

高崎の辺に蕪川という河あり。

『守貞漫稿』

喜田川守貞著。1810（文化7）年大坂に生まれ、1840（天保11）年江戸に移住した守貞が、江戸と上方の風俗の違いに興味を持ち、1837（天保8）年から書き綴った風俗百科で、1853年（嘉永6）年に成る。

○ 第二十五篇 遊戯

飛螢を觀て京坂の男女云詞、蓋京坂の童は螢を「ほうち」と云。

ほうちこい、落たら玉ごの水のまそ。

『山の手の童謡』

著者の山中笑は幕府御家人で、名は平藏保生、後に笑と改め共古と号した。本書は、1850（嘉永3）年江戸四谷（東京都新宿区）に生まれた著者が子供の頃に、東京の山の手で歌われていたわらべ唄集。

○ 螢を捕へるとき

ほ一たるこい、山見てこい、あんどの光をチヨト見てこい。

ほ一たるこい、柳の下で水のましよ、あつちの水はに一がいな、こつちの水は甘いな。

江戸時代中期の資料

江戸時代中期の資料としては、江戸浅草覺吽院の僧行智が子供の頃（天明から寛政初年頃）歌っていたわらべ唄を記した現存最古のわらべ唄集『童謡集』（1820（文政3）年成）や、江戸の童謡・童諺を数多く載せる太田全斎著『諺苑』（1797（寛政9）年序）などがあるが、いずれも螢狩の唄は見られない。ただ、この時代に螢狩の唄が歌われていたことを窺わせる資料として、太田南畝の狂文集『四方のあか』がある。

著者の太田南畝は幕府御家人で、狂名を四方赤良、蜀山人・巴人亭なども号し、戯作者、狂歌師、漢詩人として知られる。『四方のあか』の一編「巴人亭記」は、南畝が1786（天明6）年に増築した十畳ほどの書齋「巴人亭」について記しているが、この中に「東面に戸をあけて、洒落臭き机を出せり。螢こいへ雪こんへの場所なるべし」という文章が見られる。「螢こいこい雪こんこん」は、中国晋の車胤と孫康の故事“螢雪の功”を踏まえて勉強場所を示したものだが、この「螢こいこい」は螢狩の唄の一節と考えてよいだろう。

なお、江戸中期から後期にかけての上方狂歌には、螢狩の唄を踏まえて詠まれた狂歌がいくつも見出される。また、俳諧発句についても作品が見られるが、これらは別報で紹介する。

江戸前期の資料

江戸前期のわらべ唄集としては、鳥取藩士、野間義学（宗蔵）の手になる『筆のかす』（1704（宝永元）年頃成）が知られている。これは行智の『童謡集』より1世紀ほど早く、元禄期の鳥取地方のわらべ唄を集めたものである。しかし本集は原本が散逸し、写本端本から岩田勝市が採録したものが知られていたにすぎなかった（尾原，1991）。もし原本もしくは写本が完本の状態で見えたら、螢狩の唄も江戸前期まで遡れるかもしれないと考えていたところ、2005年に江戸後期の写本（資料名『古今童謡』）が発見されたことを知った。この資料は鳥取県立博物館の大嶋陽一氏によって紹介・翻刻がされた（大嶋，2007）が、残念ながら螢狩の唄は見当たらない。ただ、この写本も抄録本であるといい（大嶋，2007）、完本が発見されることを期待している。

『古今童謡』には螢狩の唄がなかったものの、さらに他の資料を当たった結果、いくつかの資料から螢狩の唄が歌われていたことを示唆する記事を見つけた。

ひとつめは、1683（天和3）年2月刊の『乱曲集』に、新作として収録された宇治加賀丞の古浄瑠璃『京わらんべ』で、その第一段に「...はやきをんゑの夕すゞみ。ほたるこいと水むすぶ。たもとすゞしきなつ衣...」とあり、この「ほたるこい」は螢狩の唄の歌い出しの言葉であると考えられる。

ふたつめは、1679（延宝7）年12月に刊行された中島随流の『俳諧破邪顕正』である。本書はこの頃勢力を伸ばしていた談林俳諧の俳人、惣本寺（菅野谷）高政の俳諧撰集『俳諧中庸姿』^{ハイクワイフノノスガ}に対する論難書で、ここから貞門派・談林派の論戦が起こっている。

随流は『俳諧中庸姿』の独吟百韻

目にあやし麦藁一把飛螢
次郎ま次郎吉夏草の陰
白い雨軒のかど屋に玉なして
(以下略)

を各句ごとに批判するが、第二句には

二郎ま次郎吉夏草の陰

此「二郎ま次郎吉」は、「螢」に付たるか、「麦わら」に付たるか。一句は、田夫の野わろにきこゆれば、「麦わら」にあひをなす事有べからず。たゞ、わらべの「ほたるこい、むしへ」といふほどに、童アを付んとおもふが、...

とあり、「ほたるこい、むしへ」は螢狩の唄と見てよい。

この「ほたるこい、むしへ」は、1686（貞享3）年正月刊の浮世草子『好色三代男』（西村市郎右衛門著）の巻二（恋は深し涼床）にも「螢こひ虫へとむしくるあつさにたえて四条河原の床涼」という文が見られる。また、中期以降の上方狂歌にも

双六のさいはひ橋のほりとて螢こひ目をよふやむしへ	鼠舌『狂歌三年物』
いささらば川辺に出て螢こひむしへ暑さもしはし忘れん	鈍莫『興太郎』
火宅をは出てもあつき夏の夜は螢よふにもむしへと言ふ	安羅『夷歌歌ねふつ』

などの歌がある。江戸時代前期から中期にかけて、京阪地域では「螢来い、むしむし」という歌詞を持つ螢狩の唄が歌われていたのではないかと思われる。

三つめは、京の俳人高瀬梅盛が1676（延宝4）年に刊行した俳諧付合集『類船集』で、「螢」の項には、「こちの水はあまいとハわらへのたはふれ」（筆者傍点）の一文がある。この「こちの水はあまい」は現在こっちの水型として知られる唄の一節を指すことは間違いない。

四つめとして、俳諧撰集『続山井』（1667（寛文7）年刊）に載る俳諧発句がある。

螢こいと人はいふ也宇治の河 林見

この句では昔から螢の名所として知られていた宇治川で、「螢こい」と「いふ=呼びかける」人がいたことがわかる。

おわりに

江戸時代の螢狩の唄は、わらべ唄集の他にも、俳諧や狂歌、浮世草子、隨筆等に断片的な記録が見られ、江戸前期の17世紀半ばには歌われていたことが確実である。また『類船集』の記述から、あっちの水型の唄も、江戸前期から歌われていたことが確認できた。これまでのところ、江戸初期の資料からは記録を見付けることはできていない。三谷（1954）は日本各地の螢狩の唄を検討し、「昼は草葉の露飲んで」系統、「山道来い」系統、「あっちの水」系統の順に広まったと推定しており、もし、三谷の論が正しければ、歌われたのはさらに古く、江戸前期以前にまで遡れる可能性がある。

引用文献

- 浅野健二（1988）新講わらべ唄風土記。柳原書店。
飯田正一他校注（1972）俳諧破邪顕正。談林俳諧集2 古典俳文学大系4。集英社。
古浄瑠璃正本集刊行会編（1990）京わらんべ。古浄瑠璃正本集加賀掾編第2。大学堂書店。
三谷栄一（1954）螢狩りの唄と田の神。日本民俗学,2(1):25-53。
中野三敏他校注（1993）寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか 新日本古典文学大系84。岩波書店。
西島孜哉編（1989）狂歌三年物。近世上方狂歌叢書12。近世上方狂歌研究会。
西島孜哉・光井文華編（1990）興太郎。近世上方狂歌叢書13。近世上方狂歌研究会。
西島孜哉・光井文華編（1991）夷歌哥ねふつ。近世上方狂歌叢書15。近世上方狂歌研究会。
西村本小説研究会編（1985）好色三代男。西村本小説全集上。勉誠社。
尾原昭夫（1991）近世童謡童遊集 日本わらべ歌全集27。柳原書店。
小高敏郎他校注（1971）続山井。貞門俳諧集2 古典俳文学大系2。集英社。
大嶋陽一（2007）野間義学（宗蔵）著『古今童謡』について。鳥取県立博物館研究報告,(44):37-53。
高瀬梅盛（1676）類船集。早稲田大学図書館蔵。[インターネットで公開]